
From Zero to Zero

FTR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

From Zero to Zero

【コード】

N3169Z

【作者名】

FTR

【あらすじ】

『Fate/Zero』の世界観を基にしたオリ主ものになります。

第1話

古来、人が一番隙を見せる時間というのは夜明け前のあたりなのだそう。

人の睡眠のサイクルや、徹夜してる人の体力の限界などいろいろな条件がそこに重なるのだそう。それだけに『朝駆け』と言われる早朝の不意打ちは古くから戦争の定石とされているとか何とか。

これは別に戦争に限った話ではなく、平時においてもこの時間帯はいろいろやばいことが起こる。交通事故も、そんな出来事の一つだ。

穏やかに終わるはずだった夜勤だったのだが、3時くらいから立て続けに派手な事故を起こした連中が救急車で運ばれて来れば、受け入れるこっちは悪い意味でのお祭り騒ぎとなる。

救急搬送で、投身自殺と並んで一番見た目がグロいのは交通事故だ。一人が瞬間的に出せる力はせいぜい1馬力。例え鷹村守や幕之内一步のパンチを食らっても、その怪我の程度はたかが知れている。しかし、交通事故となるとそうはいかない。いかんせんウン十馬力やウン百馬力で動く重量1トン以上の物体がぶつかってくるのだ、人間なんぞ豆腐と変わらない。これが車同士の正面衝突となると、宮田一郎のカウンターどころの騒ぎではない。

そんな状況なので、その夜の救急外来は戦場となった。

アメリカのテレビドラマで救急外来を扱った人気番組があったが、実際の日本の救急外来ではあんな悲惨な状況に陥ることは滅多にない。基本的にスタッフは相応にいるし、飽和した場合は受け入れを止める。たらい回しとかいろいろ非難をいただく措置ではあるが、ならば一刻を争う患者を順番待ちで並べるとどちらがマシかということで、こればかりは患者自身の運不運としか言いようがない。私たちも精いっぱいやっているし、行政だって一生懸命やっている。

それが現代医学の限界だ。

「上の受け入れは？」

手を止めずにナースに聞くと、インターホンでやり取りをしていた子が振り返る。

「手術室大丈夫です。すぐ行けます」

「おっけー。島崎君、そっち終わったら上げるよ」

手早く縫合しながら研修医に指示を出す。研修医……ちょっと前までは、私もあの立場だったのよね。月日の流れは早いものだ。

患者をエレベーターに送り込み、インターホンで外科の執刀に状況を説明する。大腿の挫創がひどい患者だが、とりあえず繋げるところは繋いでおいた。アンプタしなくても大丈夫だろうと思う。

受話器を置き、ようやく私は息を吐いた。

窓の外が、白々とし始めていた。怒涛の搬送もこれで一段落してくると思う。まずは一息ついて、コーヒーの一杯も飲めるだろう。

そう思っていた時期が、私にもありました。

フェイスマスクとグローブを専用のゴミ箱に放り込んだとき、見ていたようなタイミングで鳴った電話を受けたナースが言った。

「救急から、長田で服毒だそうです。5分から10分で到着。大丈夫ですか？」

私は神様というのが意地悪なやつだという事を久々に思い出した。

「了解、引き受ける。何飲んだか聞いて。島崎君、活性炭」

この夜、というか夜から朝にかけて、私はひたすら神を呪った。服毒に続いて今度はまたもや交通事故が来た。さすがに通勤時間帯になると事故が多い。患者のわんこそば、というより茹でたトウモロコシを無理やり食べさせられているガチヨウになった気分だ。徹夜で事にあたり、ようやく引き継げたのは朝9時のことだった。

「お疲れ様です」

「お疲れ〜」

手術着を脱ぎ、当直室に戻る途中でナースとすれ違う。まだ若い子だ。20代前半か。いいな、若いって。霧の彼方で見えなかったはずの三十路の世界が、徐々に輪郭を帯び始めた年齢の私だ。シャワーを浴びても水を弾くような肌という訳にはいかない。医師の修業にかまけているうちにお肌の曲がり角を幻の多角形コーナリングで走り抜けたことに気付いたのは、研修が明けてだいぶ経ってからのことだった。

「おはだのおはだのまがりかど〜、にきびがにきびが懐かしや〜」

疲労困憊して宿直室に入り、白衣を椅子に放り出してソファにボスツと横になる。

そのまま目を閉じると3秒後には夢の世界。今のタイムならのび太君にだって勝てるぜ、と思いつながら私は仮眠をとった。

変な夢を見た。

それは、黒い太陽だった。

何かで見たような記憶があるが、何だったのかは思い出せない。

その黒い太陽から流れ出た灼熱の何かが、街をなめとっていく様子が見えた。

阿鼻叫喚。

一瞬で人の命の火が消えていく様子に、私は言葉が出なかった。

自然災害、ではないだろう。不気味な、三流ホラー映画のような光景ではあるが、感じる熱気は現実のような痛みを伴い、人が焼けていく臭気も、吐き気を催すようなリアリティがあった。

地上に現出したこの世の地獄。

高みから見下ろしながらも、私は我が身が震えるのを確かに感じた。

「杉田先生」

肩をゆすられ、私は一瞬で覚醒した。

酷い夢を見ていたような気がするが、何の夢だったのかは目を開いた瞬間に忘れていた。

見回せば、見慣れたいつもの当直室。目の前には、見知った師長がゴミ袋を手に怖い顔をして立っていた。

「おおつ、これはお袋様」

皆から『お袋様』と言われる師長様。ナースステーションの重鎮だ。若手の医師では頭が上がらない人物でもある。医師不足がこの病院でも深刻な昨今、現場で覚えることは増える一方。そんな時に頼りになるのは経験豊富な看護師の知識であり、そんな中でもお袋様はヒヨツ子研修医にとっては懇切丁寧に実務を教えてくれる軍曹みたいな方だ。

「こんなところで寝ていると風邪をひきますよ」

「いや、ちょっと疲れたもんで。今日は日勤ですか？」

「救急が続いたと聞きましたので、少々早めに出てきました。それよりも……」

「はい？」

「忙しいのは判りますが、当直室を散らかさないで下さいとお願いしているでしょう」

お袋様が手にしているゴミ袋には、私が置きっぱなしにしてあったカップ麺の容器やポテチの袋やコーヒーの紙コップなどが入っている。

「いや、申し訳ない。片付けようとしたところに搬送が続いたもんで」

もちろんこれはその場しのぎの嘘だ。

だが、幸いなことにお袋様はため息をついて深くは突っ込んでこなかった。

「昨夜はだいぶひどかったみたいですから今回はあまり細かくは言いませんが……漫画もまた増えていますね」

「スラムダンクとバガボンド読みたいってナースたちに言われたんで」

「院内で漫画喫茶でも始める気ですか？」

「あ、いいな、それ」

「皮肉で言っているんです。とにかく、ここは先生の私室ではないんですから、早いところ片付けて下さい」

「へーい」

「この辺の玩具もです」

「それはこの部屋の守護神なんですけど」

「……」

「ごめんなさい、すぐ片付けます」

「そんなことばかりにお金を使っていないで、少しはスキンケアに回したらどうですか」

「尿素なんかは病院で手に入るからなあ」

漫画本とモバイルスーツのプラモを詰めた段ボールを抱え、お袋様のお説教を聞きながら廊下を歩く。大荷物なのでそれなりに重量がある。箱も大きくて体格に恵まれていない私では前が見えないくらいだ。

何だか学校の先生に絞られている生徒になった気分だ。実はお袋様と私は私が医者になる前からの付き合いだ。医師だった母の下で働いていた関係であると同時に、母の友人でもあったお袋様はしばしば家にも遊びに来た。

私が医者になってこの病院に勤務するようになってから、入れ替わるように母が引退した後も何かと気をかけてくれるありがたいお方でもある。

「職場の薬品を掠めるとは……」

「あはは、まあ、固いこと言わないでよ」

「コンプライアンスというものを何だと思って、って階段！」

「え？」

ふと、足元の感触が消えた。

当事者にとっては悲劇。

見物人にとっては喜劇。

私は池田屋の階段落ちのように階段を転げ落ちた。

う、受身っつ！

段ボールを放り出し、頭をかばうことだけを考えて重力の蹂躪が終わるのを待つ。医者にとって両手は大事な商売道具だけど、頭部

とどつちが大事かと言えば残念ながら頭の方に天秤は傾く。

「ごろごろと転がり落ちて、ドカツと音を立てて壁にぶつかってようやく私は停止した。」

「い、痛くて……」

世界がようやく平衡を取り戻してみれば、踊り場に漫画本とプラモがぶちまけられ、それに埋葬されるように私はひっくり返っていた。

「大丈夫ですか!？」

「な、何とか」

慌てて駆け下りてくるお袋様だが、幸い頭を打たなかったし、体も上手いこと丸めることができたからダメージはほとんどない。いやはや、スカートじゃなくてよかった。

「ああもう、何をやっているんですか」

心底呆れた声を出してお袋様が私の上のつかった段ボールをどけてくれた。

「いや、失敗失っば……あつ！ 私のベアツガイがつ!!」

哀れにも犠牲になったモバイルスーツに悲鳴を上げていると、お袋様が私の手を掴んだ。

「玩具なんかほっときなさい。怪我してるじゃないですか」

「ありゃ、ひつかいちゃったかな」

見れば、手の甲のあたりに何本かひつかき傷が付いて血が滲んでいた。

「呆れてものが言えません」

処置室でお袋様にちよいちょいと消毒してもらいながら、ありがたいお説教をいただく。

「うう、沁みるよう」

「手の手入れもしてないわね。これが年頃の娘の手かと思うと……まったく」

「だって、忙しいんだもん」

「だからと言って、こんなガサガサな手をほったらかしにしている女医はあなたくらいです」

いつの間にか、お袋様が婦長モードから個人的な知り合いモードに切り替わっている。

「少しは身だしなみにも気を配りなさい。早くいい人を見つけてくれないと、私もお母様の墓前に胸を張って報告に行けません」

「需要がないんだからしょうがないよ」

「生活態度を見直せばいくらでも引き合いはあるでしょうに」

「あはは、それができればいいんだけどね」

私にとっては漫画鑑賞は趣味ではなく生き様だ。今更変えるのは無理というものだ。

「とにかく、学歴も職業も問題ないんだし、見た目だって欲目を差し引いても悪くないでしょう。ご両親の代わりなら私たち夫婦が立ちますから、早いところ収まるべきところに収まりなさい。近場に好物件がないのなら、主人も阪大病院の方にも顔が利きますから」

声音がだんだん説教というより懇願になってきた。このまま苦手な昔話にシフトしそうな勢いだ。

「ご心配おかけしまして」

私は素直に頭を下げた。

口うるさくはあっても、人に心配してもらおうというのはこつも温かいものだと思感する。

いつか彼氏なんて人ができたら、きっとその人にもお袋様を紹介しよう。

私のもう一人のお母さんは、こつという人です、と。

徹夜明けはやっぱりきつい。見上げると、昼前の太陽は妙に黄色く輝いている。

駐輪場で愛車を暖気していると、甲高い声が聞こえた。

「さなえ先生！」

振り向くと、私の盟友であるナース1号（仮名）が立っていた。まあ、いわゆるそっち方面の同好の士という奴だ。ただ、私と違って美少年同士の掛け算の世界が大好きな困った奴でもある。『風と木の詩』を初めて読んだ時に全身にさぶいぼが出来て以来、私はどうにもああいう世界がダメなのだ。だってさあ、あそこは出すところであって挿れるところじゃないでしょ。

「続き、焼いてきましたよ」

「おお、ありがとう！」

受け取ったDVDに、きちんとプリントされた文字でこう書いてあった。

『第6話 ケイネス先生のちゅー』

「……ちよっと、タイトルおかしくない？」

「そういうシーンがあるんですよ。『これは決闘ではなくチューだ。愛の魔術師よ、尋常に立ち会おうがいい』って感じで」

「どっという空耳だよ……」

いい加減腐ってるな、こいつ。

「先生の御贔屓が大活躍ですよ」

「お、無双するの?」

「無双はしませんけど、セイバーと共闘しますよ」

「ああ、キャスター戦か」

袂れゲイ・ジャルグの辺りか。どういう映像になってるのかな。

「まあ、あとは見てのお楽しみです。いいですよ、緑川ボイス。濡れちゃいます」

「そうそう、いいよね、あの声」

御腐人系の発現はスルーするとして、あの声にしびれるというのには同意見だ。

「まあ、私としてはヒイロの方がいいんですけど」

ヒイロというとガンダムWだったか。ガンダムは『Zガンダム』のあたりで知識止まってんのよね、私。

「うーん、そっちはまだ見てないんだよね」

「あれ、まだだったんですか。今度焼きましようか?」

「いや、たまにはきちんと買うよ。大人なんだし。今はZeroで手いっぱいだよ」

話を合わせていると延々とオタク談義が続きそうなので、トリッ

プしかけている彼女の言葉を適当に流して私はヘルメットを被った。アライのSZ-Ram4。これは結構軽くて被り心地がいい。その白いヘルメットを見ながら、ナース1号が呟いた。

「うわ……また凝ったことやってますね」

「カッコイイだろう。ギャキィ」

口擬音を入れながら私は笑った。

ヘルメットの後頭部にプリントしてあるのは、Fateの魔方陣。カッティングシートをデザインナイフでちまちま切って作った自信作だ。両サイドには令呪もプリントしてある。右は衛宮切嗣風、左はケイネス風だ。知らない人が見ればただのとんがったデザインに過ぎないところがポイントだ。

「先生、やっぱり車買ったら痛車とかにするタイプですか？」

「しないよ。私や隠れオタクなんだから」

オタク趣味というものはどこまでいっても所詮はサブカルチャーだ。表に出た瞬間、その淫靡な愉悦は薄れてしまう。昨今は日本が誇る文化だと威張っている傾向があるが、私としては嘆かわしい限りだ。

でも、そんなことを力説する私にナース1号は気の毒な奴を見るような目をしながら首を振った。

「先生、隠れてない。全然隠れてないよ」

「なにおう」

快調にアクセルを吹かしながら、ハンドルを自宅方面に向ける。

朝のラッシュも終わった時間帯は走りやすいから好きだ。

ヤマハのセロー。足つきがいいということで中古で買った名機の誉れ高いトレイルバイクで、期待通りに軽くて便利でいいバイクだと思う。現行は250ccに排気量が上がっているけど、私くらいの体格なら、旧式の225ccの方がありがたい。トレッキング性能では、今なおこれに勝るバイクはないという人もいるくらいの傑作なのだから。神戸界限で生きていくにはバイクは便利だ。車の方が便利という人もいるけど、神戸は土地が狭いから駐車場代が高いのだ。

国道428号線、通称有馬街道を自宅のある鈴蘭台方面を目指してとことこ走る。過労運転は飲酒運転並みに罰則が厳しいから事故を起こすわけにはいかないのでアクセルは控えめに。

いつも通る、山ありのうねうね道。ワインディングロードを飛ばすのは楽しいという人が多いけど、飛ばさなくても楽しいと思うのは私だけだろうか。古くはこの界限には『裏六甲のウンチーニ』とかいう走り屋がいたそうだけど、セローの馬力じゃのんびり上った方が楽しい道だ。スピードに酔うというのはある意味恐怖を楽しむことだと思うけど、そんなスリルなんかなくても自然を見ながらテロテロ走れば十分に心が満たされると私は思う。

私の自宅は、親が買った古いマンションだ。

子供の頃から住んでいる家だが、今は一人暮らし。80?くらいあるからいささか広すぎて困るくらいだ。

「ただいま」

鍵を開けて中に入る時、答える人がいないことを知りながらも口から出る言葉。

誰もいない部屋に戻る悲哀は、独り者にしか判らない。

適当に靴を脱ぎ散らかしてイエローコーンの上着をハンガーにかけ、着ているものをさっさと脱いでポイポイと洗濯機に放り込んでそのまま浴室に入る。仕事帰りはさすがにシャワーでも浴びないと眠れない。

暖かいお湯を浴びていると、知らぬ間に緊張していた体の各部のスイッチがオフになり、隠れた疲労が顔を出してくる。いやはや、そろそろ歳かね、私も。

歳はともかく、流れ落ちる水の流れを見るのはいつもながら複雑な気分だ。山岳や丘陵たるべき胸部の起伏が乏しい我が身には、本来溪流のように流れていくべき水流が見当たらない。下着のカップも高校から変わっていないし、脂肪がつかずにどちらかといえば筋肉質な私としては何だかブラジャーというより大胸筋サポーターという言葉がしっくりくる。脂肪がないから寄せて上げてもできない。もうちょっと何とかならないもんかね、これ。ファンタジーで言えばエルフみたいな体つきだ。エルフと言えば、私が好きなラノベに『ゼロの使い魔』というのがあるが、あれに出てくるティファニアというキャラはエルフといっても例外だったな。エルフのくせにとんでもない凶弾を装備したけしからん奴だが、気立てが良くて可愛い子だからルイズより好きだったりする。ともあれ、女性は胸が薄いと同じ服を着ても見栄えが悪いから困る。着飾る楽しみくらいは知っているが、ベースがこれではいささか選択の幅が限られてしまう。DNAに向かってやり直しを要求したいくらいだ。

閑話休題。

カラスの行水でさっさとシャワーを済ませ、髪を乾かす傍らコー

ヒーの準備。ペットボトルの水を使ってケトルでお湯を沸かす。ポットのお湯ではあまり美味しくないからだ。

お湯が湧いたら棚からカップを二つ取り出す。

夫婦茶碗といった感じのペアのカップだ。片方は昔私がうっかり割っちゃったので接ぎはぎだらけだけど。

それぞれにコーヒーを入れて仏壇に供え、お鈴を叩いて手を合わせる。

ご両親様、不肖の娘は今日も頑張って参りました。

父は私が幼いころ、母は私が医師になったことを見届けたように去年この世を去った。今頃あの世で夫婦水入らずで仲良くやっていることだろう。そうじゃなきゃ私が困る。

そんな感じに帰宅の報告をしてから自室に入る。

漫画だらけでベッド以外はろくにスペースもない部屋だけど、私が一番落ち着ける空間でもある。

いい加減、読まない漫画はまとめてブックオフにでも持っていこうかなあ、と思いながらベッドに潜り込んだ。

冷たい布団に、一人寝の寂しさを感じる。

気楽と言えば気楽だが、それでもやはり温もりは欲しい。本当に猫でも飼おうかなあ、と思いながら夜勤に備えて私は眠りに就いた。

変な夢を見た。

目の前で、一人の青年が息絶えようとしていた。

腹部にひどい裂傷を負い、失血性ショックを起こしている。バイタル確認、クロスマツチテスト飛ばしてO型の緊急輸血、気道確保、人工呼吸、心マッサージなんて言葉が脳内を流れていく。

でも、実際には私の体はそこにはなくて、まるでモニターを見るように俯瞰的な視点で死にゆく彼を見下ろしているだけだった。

そんな彼の傍らにいる、一人の壮年の男。

手で水をすくい、倒れている彼のところに運ぼうとして、その直前で水をこぼした。

一目見て、それが故意のものであることが判った。

脳裏をよぎるのは、先日読んだ神話の一節だ。

フィン・マツクール。美髯を生やした、フィアナ騎士団の英雄。

妻となるべき女性に逃げられ、筋違いの黒い復讐の灯でその身を焦がしていた男だ。

すなわち、倒れている青年はその復讐の対象である大英雄に他ならない。

デイルムツド・オディナ。2本の剣と2本の槍を振るう無双の騎士。

ああ、なるほど、これはあの光景か。

英雄デイルムツドの、無念の最期。

誓い故に猪を狩れないがために致命傷を受け、フィンにより二度までも命を救えたはずの癒しの水を零され、そして息絶えていく彼。私は唸った。

何とついていない男だろう。何一つ悪くないのに、彼は廻り合せの果てに非業の死を遂げるのだ。

これでもなお、この男は本当に何かを恨むようなことはなかったというのだろうか。

その生真面目な性格ゆえに周りに翻弄され、犬死のように死んでいくことを受け入れるというのだろうか。

哀しい。

これが大英雄の最後かと思うと、哀しくてならない。

我ながら、思い入れのしすぎとも思う。だが、目の前で息絶えていく青年の面持ちに、私は感情が移入していくことを抑えきれなかった。

英霊でも、神話の世界の人物でもない、その高潔な一人の男性の死が、私は無性に哀しかった。

目覚めると、窓の外は暗かった。

既に陽が落ちて久しいらしい。

芋虫のようにベッドから這い出すと、よく眠っていたはずなのに何だか体が重い。

「んあ……だり〜」

独り言をつぶやきながら、何気なく時計を見る。

その瞬間、私は完全な意味で覚醒した。

やべえ、目覚ましかけるの忘れてた！

ハニーフラッシュな勢いで脱衣と着衣をすませ、玄関に走ってヘルメットを掴む。

化粧はいつも手抜きだが、今日ばかりはそれすらもやっている余裕はない。

駐輪場からセローを引っ張りだし、暖機30秒で発進した。

ヘッドライトが夜道を照らし、エンジン音が夜の住宅街に響く。

今の私の状況は、一言で言えばやばい。二言で言えば超やばい。

限界まですっ飛ばしても30分は遅刻だ。

たかが30分、と考えてはいけない。大人の世界は時間厳守が鉄則だ。

その30分でもしものことがあれば、患者にも迷惑がかかる。プ

口として恥すべき大失態だ。

ああ、患者、患者のために私は、いまこんなに走っているのだ。急げ、セロー。おくれてはならぬ。単気筒20馬力の力を、いまこそ知らせてやるがよい。風態なんかは、どうしても……良くはない。さすがにバイクでまっぴは寒いよ。

しかし遅いワゴンだな。ちょっと追い抜きかけさせてもらおう。気の毒だが私のためだ。

そんな感じに脳内で勝手に改変朗読中の『走れメロス』が、知らぬ間にながいけん閣下の『走れセリヌンティウス』にすり替わった時だった。

差しかかったややキツめのカーブで事件は起きた。

対向車線のトラックが、中央分離帯を踏み越えて目の前に迫ってきた。

やたら大きな、8トンクラスのトラックだ。ライトの光量が私の網膜を突く。

ばっか野郎！

反射的に右手と右足がブレーキを握り、蹴り、それに応えて車輪がロックした。いかに扱いやすいセローでも、扱っこの能力以上の運動性能は発揮してはくれない。かなりのスピードが仇になった。スピードとタイヤのグリップと、そして体重移動のタイミンが微妙にずれた。滑ったタイヤが余計なところでグリップを取り戻す。

ハイサイド。

次の瞬間、私の体は宙に浮いた。

引き伸ばされた時間の中を、私は漂った。

これはやっっちゃったかなあ。

飛ばされた先は谷側だ。

木にぶつかるかな。

転げ落ちるような道じゃなかったけど、華奢な私じゃ無事で済む気がしない。

ぐるぐるとまわる視界の中、一瞬だけ見えたのは小さな祠だった。お稲荷様か、道祖神だろうか。

神様なら、ちょっと助けてくれないかなあ。手を合わせたこともない不信心者な私が言うのも厚かましいけど。

でも、やっぱり年齢イコール彼氏いない歴は寂しすぎるよ。

男は三十路まであれなら魔法使いになるそうだけど、そういう意味では女は妖精になるんだそう。

高校は女子高だったし、大学は勉強三昧、研修期間は生きているだけで精一杯だったし。医者が晩婚の横綱というのは本当だと思う。そういう意味での幸せってなかったよなあ、本当。

やだなあ、寂しいなあ。

そんなかわいそうな私だ、せめて全治3か月くらいにおまけしてくれないかなあ。

それもダメなら、せめて苦しまない程度に一思いに済ませて欲しいよ。

そんなことを考えながら、私は背中に衝撃を感じた。

鈍い音がする。ぐちゃつとかぼきつとか。これは木が折れる音だろうか。

祠にぶつかったのかな。

あるいは私の骨が折れる音か。

許容限度を超える衝撃に、私はあっさり意識を手放した。

永遠のような刹那。

私はまた夢を見た。

何かが裏返し、何かが崩れて再構成されていくイメージ。

そんな揺らいだ空間の中で、一人の青年が哭いていた。

自らの槍で、自らの胸を突いて死にゆく青年が、漆黒の呪いを振りまいている。

『その夢を我が血で穢すがいい！ 聖杯に呪いあれ！ その願望に災あれ！ いつか地獄に落ちながら、このデイルムツドの怒りを思い出せ！』

紡がれる憤怒と絶望と、結晶化しそうなほどの呪い。

一人の大英霊が、己の存在そのものを呪詛として世界を呪っていた。

血を吐くような叫びと、まき散らされる怨嗟。

主人と従者、双方の認識のすれ違いが招いた、必然としての悲劇の結末がそこにあった。

でも、その慟哭は誰に届くこともなく、静かに虚空に飲み込まれて、消えた。

どれだけ寝ていたのは判らない。

気が付けば、アスファルトの上に仰向けに倒れていた。

無意味に男前な動きで、私は慌てて起き上がった。こういう場合は本当は体の末端から動くかどうかを確認してから動かなければならないんだそうだけど、今はそれどころではない。幸い、体にひどい痛みはないようだ。

寒い。見回せば、あたりは山道。下はアスファルト。冬の冷気がジャケット越しに体温を奪っていた。

冷えきった体を震わせながら携帯を取り出して時間を見ると、時間はそんなには経っていないようだ。

「いや、良く無事だったな、私」

それなりに交通量のある道だ。下手したら後続の車に轢かれていた可能性もあったことだろう。私の悪運も、まだ捨てたものではないらしい。

意識を失っているだけに頭を打っているかと思っただが、ヘルメットを脱いで確認しても傷はない。一応念のため、後で職場で検査してもらおう。

急いで倒れているバイクを起こして跨り、スタートボタンを押す。幸いにもセル一発でエンジンは回った。軽快に回るエンジンを確かめるように軽くアクセルを吹かして急いでクラッチを繋いだ。

ここまで遅刻しては、恐らく落とし前は相当高いものに付くだろう。恐らくは三宮で神戸牛だ。

来月の給料のどれくらいが飛んでいくかを考えながら、急いで山道を下った。

でも、そんな来月の心配は必要ないのだと気づいたのは、それからしばらく経ってからのことだった。

違和感は2つ目のカーブを曲がった時に訪れた。

毎日通っている道だと、体は自然とカーブのパターンを覚えていくものだ。右が来たら次は左。その次が右、左、インド人を右。

そんなリズムに違和感を感じた。

カーブのリズムだけじゃない。アールも違う。

まるで知らない道を走っている感覚。

不気味なものを感じて、私は一旦バイクを止めた。

見下ろす夜景。

その光の帯のパターンまでは細かくは覚えていないが、それでもどこか違和感を感じる。

「……とりあえず、落ち着け」

私はラマーズ法の深呼吸をして、自分をなだめた。

きっと何かが自分の中でずれているだけだ。内臓を抜かれているわけじゃないんだ、得体がしれない飛行物体に拉致られた訳ではないだろう。ちよつと勘違いしているだけだ、きっと。

まずは街まで下りてみよう。そうすればどの辺かは判るはずだ。

神戸は南北に走れば必ず2号か43号にぶつかるし。

でも、その前に見えるはずの山麓バイパスはどこだ？ いつもくぐるはずのバイパスを、私は通。

呼吸が早まるのを感じながら山道を下りきり、大きな通りに出て周囲を注意深く見回す。

この道は国道であるらしく、その道の上に標識の青い案内板を見つけた。

そこには、こう書いてあった。

『冬木市役所 400m 海浜公園 2km』

ふゆきし？

冬木市？

……冬木市！？

いろいろな物が脳内をぐるぐる回り、私は咳いた。

「……どっとなってるのよっ。」

第2話

翌日、大きな橋の下にある公園で私は頂垂れていた。

私の上には、赤い、神戸大橋みたいな外見の橋。hollow ataraxiaで黒い変なのがわらわら渡って凜とアーチャーにぶちぶちやられていたあれだ。名前は思い出せない。冬木ビッグブリッジだっけ？

ビッグブリッジと言えばギルガメッシュ。ギルガメッシュかあ、エクスカリパーとか思い出すなあ、英雄王としてあれが召喚されたらトッキーどんな顔したのかなあ、などと、ともすれば現実から逃避したくなるくらい私は疲れ果てていた。

体が重い。気持ちも重い。

どうなっているんだ、これは。

あれから、パニックになりそうな自分を押さえつけ、何とか現状を把握しようと動き回った。

まず、一回現場に戻った。

壊れた祠の場所に行ったが、特に収穫はなかった。街灯とヘッドライトの明かりの中に見えるのは、スリップの跡や祠の残骸だけ。祠の御神体は何だったのか判らない。よくあるパターンだここに封じられた何かが云々ということかと思っただけ、そういうわけでもないらしい。バイクで自宅に戻ろうともしたが、自宅に繋がるはずの道がなかった。

見える範囲の地理も全然違っていた。山を下りても、そこには三宮も元町も中華街もポーアイも六甲アイランドもなかった。神戸大橋のようなでっかい橋はあるにはあったが、そもそも橋のかかり方が違う。何で東西に橋が架かっているのやら。神戸大橋なら南北だろう。街を分断するようにでかい川が流れているのも予想外だ。知らんぞ、こんな川。関西にないだろう、こんなもの。

そんな状況の中、調べが進むに従って一番困ったことは、何と云っても自分のことだ。まず、勤め先の病院がなかった。心当たりにも電話をかけても、どこも不通か間違い電話。携帯が通じないからどれも昔懐かしい公衆電話からかけた。だが、財布の中に長逗留していた『銀魂』の銀さんのテレカに穴をあけてまで手に入れた情報は、私の知っている人とは連絡が取れないという事実だけだった。

次に駆け込んだ先は、コンビニだ。

地図を買おうと思ったが、これには別の問題が立ち上がった。お金だ。

地図を手に掴んでレジに向かった時、前の人の会計を見て私は目を疑った。

千円札だった。

その肖像は夏目漱石。

古いお札だった。総毛立つ思いで新聞の棚から新聞を手取る。デイリーだ。見出しは阪神タイガースばかりだし内容もいまいちあてにならないけど、日付だけは正確だろう。紙面に踊る『新庄』の文字に嫌な予感を感じながらその日付を見て、私は絶句した。

1992年。

私は6つかそこらだよ。

明らかになつたことは時間のずれだけではない。最大の問題は、流通しているお金を持っていないことだ。お財布には、常に3万円くらいのお金は入れてあるけど、そのお金は紙くずだということだ。私の手持ちのお札は諭吉に一葉に英世だ。だが、コンビニで見た範囲では、流通しているお札の人物像は漱石に稲造だった。一万円札は同じ諭吉ではあるけれど、裏面が違っているだろう。

クレジットカードもキャッシュカードもダメだった。街角の看板を見るに、みずほ銀行はこの時代にはまだ第一勧業銀行だったよう

だ。ハートのマークなんて私の世代じゃ記憶の彼方だよ。

つまり、ニアリーイコール文無しだ。

私の持てる経済力は、小銭として持っていた千円ばかり。今どき、小学生でももつと持っているだろう。原始的な手段でお金を稼ごうと手ぬぐい被ってゴザ持って柳の下に立って『お兄さん、こっちこっち』とやるうにも、そのゴザを買う事もできないと思う。その硬貨すらも、実際には製造された年号的に問題があるものばかりだが。

あれこれと考えながら朝まで町中を駆けずり回り、現状を抜け出す一縷の望みを探し続けた。

それがいずれも不首尾に終わり、朝になって開くと同時に私は『中央図書館』と銘打たれた図書館に駆け込んだ。何しろインターネットがまだほとんどない時代だ。Windows95すらもないし、当然ネットカフェなんかから情報入手の手段は限られてくる。そんな時代では、図書館の存在価値は私がいいた時代とは比較にならない。

入り口のあたりで何やら派手に工事していたが、営業の方は普段通りに行われているらしい。

欲しいのは何をおいても地図だ。まずは地理を押さえなければならぬ。血走った目で地図を漁ると、冬木市の立地が俯瞰的に理解できてきた。日本全図の中で、ちょうど私が知る神戸市にすり替わるように存在しているようだ。

新幹線は微妙に違うところを走り、JR、阪神、阪急もまた少しずつ違うところを走っている。駅名ももちろん違っていった。

まるで、日本地図の中でこのエリアだけが不気味な変質を起こしたがん細胞のような感じだ。

柳洞寺、冬木ハイアットホテル、私立穂群原学園、冬木市民会館の文字が見える。

なけなしの硬貨を使って地図のコピーを取り、私はそのまま市役

所に向かった。

最後の望みとして、この世界に私が存在しているかどうかを確認した。

窓口のお姉ちゃんの事務的な声が、まだ耳に残っている。

『そのような方は市内には在住されておりません』

さて、どうしたものか。

生まれてからずっと神戸在住の私だ。つまり、この世界では私は存在していない人間と位置づけられているらしい。

現状で並べられたカードを見る限りにおいて、そのことが私は受け入れねばならない最もきつい事実だった。

実際、これならいろいろルーズな中世ファンタジーの世界の方がまだましだ。

管理が行き届き、個人を特定するインフラが発達した世界においては、パーソナルデータが存在しない私は幽霊のような頼りない存在に成り果てている。

友人も知人もいない世界に、ただ一人放り出された事実。まるで宇宙に命綱なしで放り出された宇宙飛行士のような気分だった。

一番最初に思い浮かんだのは、記憶喪失ということで警察に駆け込み、法の保護を求めることだ。

全生活史健忘扱いということなら仮の戸籍を得ることができたはずだし、医師の資格は役に立たないにしても医療機関への就職なら知識や経験が活かせるだろう。そこで夜学にでも通いながら資格を取っていく生き方が一番リアリティがあるように思う。

だが、記憶喪失というものはこれでなかなか実証が難しいものだ。この制度は、もともとは捨て子などの救済のための制度を拡大した

ものであり、とぼけた奴が『僕、記憶喪失です』と言えは誰でも戸籍がもらえるわけではない。下手な芝居が通じるほど、警察の目は節穴ではないと思う。

真正直に自分の正体を詳らかに話し、狂人扱いされてしばらくその手の施設に放り込まれるのならそれもそれでいいが、自立までには時間が掛かりそうだし、何より医師免許はもらえなくなるだろう。これでも、医者であることには多少の誇りがある。それ以外の生き方を模索しなければならなくなると、人生設計を一から練り直すくらいの覚悟が要る。

ベンチに座ったまま、私は頭を抱えこんだ。

目先のことと同時に、オタク趣味人なりの不安もあった。

冬木市という言葉は、私を知る範囲では一種の死亡フラグだ。

TYPE - MOON社の生み出した世界観にある地名で、その地では血で血を洗う抗争が日常茶飯事だったはず。魔震後の新宿よりはマシかもしれないが、それでもいつ何時物騒な連中が得体がしれない手法でドンドンパチパチやらかすか知れたものではない。

1992年という時間がその世界観だとどのあたりかを思い浮かべてみれば、明確なところは判らないが、恐らく第4次聖杯戦争のあたりだろうか。

手元の地図に目を落とせば、目を引くひとつの施設の名前があった。

冬木市民会館。

記憶が確かなら、これは確か第4次聖杯戦争の決着の地だったはずだ。7体のサーヴァントが武威や秘奥、権謀や詐術の限りを尽くして潰し合い、最後にこの場所に小聖杯が降臨して、その拳句に周辺がひどい目に遭うという話だったはずだ。

その大災厄の渦中に放り込まれなかったあたりは助かったが、いつその悲劇が起こるか知れたものではない。

そこで怖いのが、SFなんかでよくあるいわゆる世界の修正力だ。

そんな物騒な世界であるからには、もしこの世界に修正力なんてものがあるのなら、私は無事には済まないだろう。漫画やSFで語られる異世界分子の辿る末路は、大抵悲惨な結末に終わっている。

私が好きな漫画であるかわぐちかいじの『ジパング』では、紛れ込んだ異分子たちは矛盾のない形で死という結末を迎えることとなっていた。まるで世界の免疫が働くように。

そういう点で、平行世界を矛盾なく移動する概念をテーマにした漫画が古い作品にあった。『神星記ヴァグランツ』と言う作品だが、その中ではヴァグランツと言われる能力者はシフトと言われる転移能力を使って世界を渡るのだが、汎世界におけるそれぞれの世界の固有の資質を手に入れながら世界を渡るので異物扱いにはならないとか何とか。近未来の人物が光線銃を持って中世風の世界に渡ったら、その銃が火縄銃のようなつかい銃に変わっているという描写は興味深かった。

冬木市という言葉と平行世界というお題があれば、想像できるものは第2魔法というやつだ。ゼルレッチというおっさんが使う異世界を渡り歩く魔法だったと思ったが、きのこワールドもこの辺になつてくると設定がややこしすぎて広く浅くがモットーの私にはついていけなかった記憶がある。

ともあれ、魔法使いでもヴァグランツでもない私がこの世界の一部にきれいに収まるのか自信はないし、どうすれば自分がこの世界にとつて異物にならずに済むのかもさっぱり判らない。そう言えばヴァグランツの世界観では自分の意思で世界を渡れない平行世界の漂流者のことをビオサバルと呼んでいて、肅清の対象になつていたっけな。今の私は、まさにそのビオサバルだ。そのことが妙なことにつながらなければいいのだが。

ともあれ、こんな目に遭わせてくれたのがどのどいつか知らないが、見つけ次第ひっぱたいてやりたかった。

そんなこんなのあるれこれを必死に考えるが、思考が今ひとつクリ

アにならない。恐らく、ろくに物を食べていないからだろう。グルコースが充分に脳みそに回っていない感じがする。

手持ちのお金の小銭ばかりでは、あんぱんと牛乳だけの支出でも大ダメージだ。摂取カロリーが絶対的に足りていない。腹の虫は鳴り続けているが、それでも先が読めないからには考えなしに無駄遣いは出来ない。ジリ貧だ。

そんな私の前に、人の気配を感じた。

顔を上げると、興味津々という感じのがきんちよが数名、私を動物園の生き物のように見つめていた。

「おばちゃん、こんなとこで何しとつ？」

がきんちよ諸氏の代表と思しき少年が言った。負けん気が強そうな連中だ。命知らずな言葉は聞かなかったことにしてやろう。今の私には、そんなことに振り向けるリソースはないのだ。

それをきっかけに、がきどもが適当なことを言い始める。

「お財布落としたん？」

「男にふられたん？」

黙れがきども、ブタに変えるぞ。そんなにひどい顔をしているのだろう、私。だからと言って傷口に塩を塗るような真似はやめて欲しいぞ。

そんな彼らの足元には汚いサッカーボール。そうか、もう学校も終わる時間帯か。やや離れたところにランドセルが置かれているところを見ると、学校帰りにみんなでサッカーでもしているのだろう。そう言えば、がきんちよ諸君とセイバーと一緒にサッカーして遊んでいるシーンが何かであったっけね。元気があれば私もそれくらい

のことはしたいところだが、残念ながらそんな余力は今の私にはない。

「……おなかが空いたんだよ」

正直に言うと、がきんちよ諸君が驚いたような顔をした。

「おばちゃん、文無しなん？」

どこで覚えて来るんだ、そんな言葉。

「そつだよ、悪いか。全部政治家と官僚が悪いんだよ。ほら、あっち行きな。知らないおばちゃんに話しかけちゃいけないって学校で言われてるだろう」

適当に流して追い払おうとした時だった。

「ん」

一番年かさの男の子が、握った手を伸ばしてきた。何かと手で受けると、ぼとりと小さな塊が手のひらに落ちてきた。

何かのいたずらかと思ったら、手のひらに載っていたのは、一個のキャラメルだった。

「元気出し」

ニカツと笑った少年の笑顔が、眩しかった。

恐らくは、この少年のおやつなのだろう。大人が茶菓子がわりにくれるのとは意味が違う。彼にとっては、それなりに大事なお菓子なはずだ。

そう思ったとき、思わず純粋な厚意が胸に染みて目頭が熱くなった。

「ありがとう、恩に着るよ」

年端もいかぬがきんちよの思いやりにも、ささくれていた私の心が少しだけ軽くなった。

その夜、私は公園の端っことで野宿を選択した。

風が冷たく、気温も低い。バイク用の上着を着ていても体の震えが止まらなかった。

宿を取るうえにもお金はないし、行くあてももちろんない。

ゴミ箱から取り出した新聞紙を体に巻いて、ただ朝が来るのを待ち続けた。気温はかなり冷え込んでいる。うっかり眠ったら、恐らく低体温症になってしまうだろう。

私なりに考え整理がついた打開策は、やはり法の保護を求めることだった。

ただし、行き先は警察ではなく市役所だ。

ソーシャルワーカーを紹介してもらい、そこで自分の問題を素直に話すべきだと考えた。

いきなり警察ではどうしても事件性を疑われるだろうから、ここは民事的な側面から切り込んだほうが穏やかに事が進むと思うからだ。

『自分でもおかしいことを言っていると思っけど』として話をしていけば、いきなり窓に格子の付いた病室に放り込まれることはないと思う。

とにかく、法的に幽霊な今の状況をなんとかしなければ明日が見えない。保護を受ければ、ご飯にありつけるかもしれないし。免許やお金は、行く前に全部処分しよう。偽造罪とか言われると厄介だし。

鳴り止まないお腹を抱えて、明日のことだけを考えて私は時間を潰した。

深夜になるとますます気温が下がる。

空腹を紛らわせるために水栓の水ばかり飲んでいたので、どうしてもトイレが近い。

この公園に公衆トイレがあったのはありがたかった。

意地悪な神様が、さらに下の世界に私を招待してくれたのは、2回目のトイレに行った時だった。

深夜、ヘルメットだけを手に持って公衆トイレに向かう。バイクのヘルメットホルダーというのは、実はヘルメット泥棒にとっては都合がいいものなのだそう。刃物でヘルメットのストラップをじよきんと切ればヘルメットをかつぱらうことができる。ストラップが無くて1000円で捌ければ元手ゼロで1000円の儲けだ。タチの悪い高校生あたりはよくやるらしい。たまにフルフェイスのヘルメットをワイヤーロックでバイクに固定しているのを見かけるが、あれはそういう輩への対策なのだそう。

用事を済ませ、仮設の寝床に戻った時、ぽつんと頬に雨が落ちてきたのに気付いた。

最低の状況の時には、追い打ちというものがあるのが世の中であるらしい。

「ちえ、雨か」

呟いて空を見上げた。

そこに綺麗な星空を見て、私の思考が止まった。
妙だ。雨雲などどこにも見えない。

「なんじゃ？」

頬つぺたを触ったとき、背筋に冷たいものが走った。

ぬるりとした感触。職業柄嗅ぎ慣れた、鉄のような匂いがする。

恐る恐る指を見たとき、そこに見るんじゃないかと心底思う赤い液体が付着していた。

どこかで、妙な音が聞こえた。それが自分が生唾を飲み込む音だと気づいたとき、風に乗ってどこか狂的な愉悦の音が耳に聞こえてきた。

「旦那、いつぺんにやつちやつたらつまんねえよ」

「ですがリュウノスケ、血の雨というものの実物が見たいと言ったのはあなたではありませんか」

悲しいことだが、私にはそれが何の声なのか判った。判りたくないのに判ってしまった。

およそ想像できる中で、最も聞きたくない類の声だ。

思考より先に体がそのことを理解し、筋肉が痙攣を始める。恐怖のあまり、私は震えた。失禁しなかったのは、たまたま膀胱が空だったからにすぎない。

逃げないと。

私は足音を殺してその場を離れようとしたが、この時ばかりは相

手が悪かった。

「おや、こんな時間に通行人がいたようですね」

どこか間延びした、甲高い声が耳に届く。その通行人というのが、私のことを指していることは明らかだ。

逃げよう。

そう思っただけでも、足が動かなかった。生まれたての子鹿のように、足が震えて立っているだけで精いっぱいだ。

暗がりから滲み出るように、二つの影が現れる。

一つは一見イケてる青年、もう一つは異貌の巨漢だった。

「あれ、お姉さんこんな時間にどうしたの？」

癪に障る声だった。チャラ男っぽい、人を舐めた声。でも、今の私にとってはそれは私の生殺与奪の権利を握る絶対者の声だった。

大声を出したくても声が出ない。恐怖に思考が支配され、頭蓋骨の中に響くカチカチという音が、自分の歯が鳴っている音だということにすら気づかなかった。

私は知っている。こいつらの正体を。そして、こいつらの趣味嗜好の異常さを。

そんな私を見ながら、巨漢が悲しそうに首を振った。

「おお、お気の毒な御嬢さんですね。通りがかった場所が悪かった」

「そうだねえ。知られちゃったみたいだし」

自分に向けられたその視線のあまりのおぞましさに、全身に鳥肌が立った。セクハラい目で見られる方がまだいい。これは、人を物だと思っただけで見る目だ。私を壊して遊ぶことを楽しみとする目だ。

それを理解した瞬間、本能が体を支配し、うまく繋がらなかった回路がようやく機能した。それは生死の際という原始的な恐怖から逃走するという本能だ。

私は、身をひるがえして走った。

運動神経はあまり自信がある方じゃない。運動会の徒競走でも遅くはないが1位にはなれないくらいの走力しかない。

それでも、今はその走力だけが頼りだった。

目の前の、人の形をした死と絶望の権化からの逃走。もって生まれた二本の足に全力を込めてこの場から遠ざかる。

だが、そんな必死の逃走は、3歩目を踏み出す前にあっさりと終了した。

飛来した何かが私の左足をからめ捕り、私は派手に転んだ。したたかに顔を打ち、鼻の奥に金臭い臭いがこもった。慌てて立ち上がろうと地についた右手にも、何だかぬるりとしたものが次々に絡み付いて来て私の自由を奪った。

必死にもがいても、締め付ける力はちっとも緩みはしない。

声にならない悲鳴を上げながらもかく私に向かって、二人分の足跡が近寄ってくる。

「ねえ旦那、最近子供ばっかだったから、たまには大人で遊びたいんだけど」

「いいでしょうリユウノスケ。あなたの流儀を尊重します」

「やり〜。このカミソリ、研いだばっかなんだよね」

来るなど悲鳴を上げたくても、口の中が乾き切っていて声が出ない。

目の前で光る鈍い光。

今にも失神しそうな恐怖の中、あんちゃんの楽しそうな顔が妙に

醜悪に見え、それが私の中の火薬庫に火を付けた。

爆発するエネルギーの名は、憤怒。これでも元から口より先に出る右ストリートな性格だ。

あんちゃんが勝利者の足取りで私の前に屈み込んだとき、私は自由になる右足で、思い切りその両足の真ん中を蹴った。

こういう時はスナップを効かせるのがコツだが、今度ばかりは恥骨も砕けよとばかりに思い切り蹴り込んだ。

絵に描いたような直撃を受け、悲鳴を上げてあんちゃんのたうち回った。

ただの痴漢だったら、ここで逃げの一手だったことだろう。だが、私の体を縛る得体がしれない触手は緩む気配もなく、今しがたまで自由だった右足も触手が絡みついてその自由を奪ってしまった。

手詰まりだ。そんな私の前で、あんちゃんがダメージから回復しつつあった。

状況は最悪だった。あんちゃんの目に、怒りが満ちていた。

「やってくれんじゃん」

禍々しい笑顔を浮かべながら、あんちゃんがざらりと光る刃物を横薙ぎに一閃した。

咄嗟に顔を背けたので『赤い目隠し』をされることはなかったが、頬に痛痒い感触が走り、赤い飛沫が散った。かなり鋭利なカミソリだ。だからだと喉に落ちてくる血の生暖かい感触に、私は憤死しそうな怒りに駆られた。

女の顔に刃物を立てるとは！

私の中の恐怖が、その事実には朝露のように消えた。

今、私を支配しているのは純粹な怒りだ。

こいつらが、許せなかった。

いくら敵が強大でも、最後は噛みついてでも反抗してやろうと決意した。

ただじゃ死なないぞ、お前ら。歯には雑菌がいっぱいいるんだ。動物咬傷とは言わないが、人に噛まれても簡単に蜂窩織炎くらいにはなると知れ。

そんな見当違いの覚悟を決めた時だった。

何がきっかけだったのかは判らない。

周囲で、唐突な風の渦が巻いた。

それに応えるように、青白い光の爆発が起こる。

な、何ぞ!?

私のヘルメットの辺りから、夜闇を切り裂くような燐光が奔流のように迸った。

目を焼くそれは、まるでSF映画でUFOが降りてきた時みたいな派手な光だ。

同時に、左手の傷に鈍い痛みが走った。どういう仕掛けか、甲にある痣のような引っかけ傷が鈍く光っていた。

こいつらが何かやったのかと思ったが、目の前の二人の表情にも驚愕が見て取れる。

「いけません、リュウノスケ」

巨漢の声が響き、あんちゃんを抱えて巨体に似合わぬ軽快な動きでその場から飛び退った。そう言えばジル・ド・レエも元は軍人だっけね。

間髪を入れず、今まであんちゃんが立っていた場所に轟音と共に突き立ったのは真紅の槍。

「な、何者！」

「それは俺の台詞だ、外道」

私のすぐ隣から聞こえて来たのは、深いトーンの男の人の声。

今まで誰もいなかったその場所に、翡翠色の長身の人影があった。凡人の私にも、その身が纏う神気が判るほどの神々しさ。太陽神のような美丈夫は私を庇うように立ちふさがり、その両目に怒りを湛えて私を虐めていた兩名と相対した。

「我が主に対する暴戻なる所業、断じて許さん。覚悟はできていような」

凜としたその声に、巨漢は慌てたようにあんちゃんを抱えてそのマントのような衣を翻した。

それを逃がさじとばかりに、美丈夫の手が一閃する。

黄金色の光が走り、短槍が放たれた。

しかし敵もさるもの、どういつ手品か知らないが、その投げられた槍の先で巨漢が煙のように消えた。それと同時に、私を縛めていた触手も煙のように消えた。

縛めが解けたものの、私はあまりに唐突な出来事に身動き一つできなかつた。

「……逃げたか」

苦々しく表情を歪ませたのもつかの間、地面にへたり込む私に美丈夫が向き直った。

「し無事ですか」

優しい、労りに満ちた面持ち。

慇懃に跪く美丈夫のそんな様子に、極限まで緊張していた私の中のスイッチが次々にオフに切り替わっていく。

助かった。その事実を認識した瞬間、ただ漏れになっていたアドレナリンの余韻に体が痺れ、猛烈な震えが体を支配した。怒りに塗りつぶされていた恐怖が、その利息を取立てにやってきたように。

殺される、という恐怖。

殺されたかも知れない、という恐怖。

人が生命体であるからには不可避な恐怖が、幽鬼のように心を覆って私を塗りつぶしていた。

「わ、わ、わた、私……こ、殺さ……」

口元が震えて言葉が紡げなかった。

そんな私の肩に、美丈夫が手を置いた。

「ご安心ください。もう、大丈夫です」

その言葉がするりと心に染み込み、闇を切り裂く光のように私の中に充満した恐怖をかき消していく。

恐怖のあまりに止まっていた様々なものが動き出した。涙腺も、

そんなもののひとつだった。

滂沱たる涙が、私の両目から溢れた。

怖かった。本当に、怖かった。

恐らく一生涯夢に見るほどの恐怖を味わった。その恐怖を洗い流そうとせんばかりに、私の頬を涙が伝った。

ただ、子供のように泣きわめく私は、さぞみっともなかったことだろう。

それでも、私は堪えきれずに声を上げて泣き続けた。

落ち着くまで、どれほどの時間を要しただろう。

1時間。いや、もっとか。

その間、美丈夫は嫌な顔もせず私の肩を支え続けてくれた。

ようやく落ち着きを取り戻し、ベンチに腰を下ろして私はなんとか感謝の言葉を口にした。

「……ありがとう。本当に、助かりました」

ただシンプルに、感謝だけを述べる私に美丈夫が微笑む。

「当然のことをしたまでです」

艶を含んだ甘い声だ。しかし、その裏にある芯の強さも同時にうかがえる凜とした声だった。

そんな美丈夫の様子を見つめる余裕を、私はようやく取り戻した。翡翠色の軽装鎧。やや癖のある髪を撫で付け、その眦に小さなホクロがあった。

初めて会う人物。

そして、私がよく知る人物でもあった。

武内崇は絵の修行を今一度積むべきだ。実物は、彼の絵など比較にならないくらいかっこよかった。

姿形だけならば、どのレイヤーだという感じではある。だが、その身に纏った神気を感じた者ならば、彼を痛いコスプレだと思っ奴はいないだろう。漂ってくる圧倒的な気配に触れれば誰にだって判る。

彼は、本物なのだ。

そんな彼が、静かに言った。

「落ち着かれましたら、貴殿の御尊名を賜りたい」

ゴソンメイ……あ、そうか、名前か。私は慌てて答えた。

「す、すみません。私、杉田さなえと言います。市内で勤務医やっています」

そんな私の言葉に、美丈夫は居住いを正して私の前に跪いた。

「御尊名、確かに承りました。サーヴァント・ランサー。召喚に応じ、ここに罷り越しました。今、この時よりこの身は貴殿の槍。必ずや敵を退け、栄冠と聖杯を御前に捧げることを誓いましょう」

どこかで予想していた、彼の言葉。

左手の傷が痛みを発した瞬間から、もしかしたらとは思っていた。目の前で跪くのは、ランサーのサーヴァント。

そして、左手で光った歪な傷痕。

つまり、私は望んでもいない形で聖杯戦争というものに巻き込まれてしまったのだと。

何かの冗談だと笑い飛ばすには、先刻私に降りかかった出来事はあまりに鮮烈に過ぎた。

何故、いかなる力が働いてこんなことになったのか、理屈は理解できない。英霊を召喚するには魔術師である必要もあるし、呪文と魔法陣だって要るはずだ。それに、大英雄を呼び出すなら触媒だつて必要なはずだ。何より、この世界のランサーはケイネス・エルメロイ・アーチボルトが召喚するはずだろう。何より、何故魔術師でもない私の身に令呪が現出したのだろうか。

「あ、あの、わ、私がマスター、なんですか？」

念のため発した質問に、ランサーは深く頷いた。

「は。貴方が我が主に相違ありません」

どうやら間違いではないらしい。

つまり、私はマスター。聖杯をかけて殺し合う、7人の内の一人となってしまうたということだ。

全身の血の気が音を立てて引いた。

聖杯戦争とは、魔術師たちの狂気の宴だ。

目の前にいるランサーを従えるということは、その宴の主賓の列に加わること。

つまり、今しがた味わった恐怖を今一度味わうことになるかもしれないということだ。

そう思った瞬間に、鳥肌が立った。

聖杯戦争。

その抗争に参加している面子が脳裏を駆け抜けていく。

黄金の剣を振るう、人間大の波動砲がいた。

無限増殖し、音も無く人を殺す奴がいた。

宝具の雨を降らせる我様がいた。

くわえタバコで銃器を扱い、容赦なく敵を屠るデューク東郷の親戚みたいな奴がいた。

拳を添えた状態から布団を打ち抜きそうな八極拳の達人がいた。

体は蟲でできているアンリミテッド蟲ワークスなゾリンゲンじじいがいた。

そして、今しがた邂逅した古き神々とチャンネルが繋がっているシリアルキラーがいた。

そんなすぐ簡単な計算式を、私の脳みそは数秒で解き終わった。

結論……無理だ。

冗談じゃない、私はただの一般人だぞ。そんな超人たちの集う宴

でダンスを踊れと言われても出来る訳がない。聖杯戦争は、殺し合
いだぞ。道端のゴミのように、あっさりとかくびり殺されてしまう。

もし本当に何でも望みが叶うなら元の世界に帰るために聖杯を求
めるのもありだろうけど、あの聖杯は汚染済みなことを私は知って
いる。そんな気の利いたことをしてくれる訳がない。

どうするんだよ、こんなの。

打開策と言ったって、助けてもらった恩を棚に上げて有無を言わ
せず令呪の三画を使ってランサーを自害させて、どこかにとんずら
するくらいしか思い浮かばないぞ。

「恐れながら、我が主」

あまりの状況に震え上がり、現状の出口を探して狼狽える私にラ
ンサーが言った。

「この辺りは瘴気が濃すぎます。場所を移動されたほうが良いと存
じます」

言われて気付いた。

確かに、妙に生臭い空気が漂っている。それはまるで鉄を口に入
れたような、金臭い空気だ。

そこまで考えたとき、私はその正体に思い当たった。

先ほど雨生龍之介とキャスターが言っていた、『血の雨』という
ものについて。

慌てて立ち上がり、その空気が漂ってくる源に足を向けた。

その私の肩に、今一度ランサーの手が置かれた。

「おやめになられたほうが……女性が見るべきものではないかと」

その言葉に、私は自分の予想が正解である確信を持った。

怖いもの見たさ、というのもあったかも知れない。だが、そこにあるものに呼ばれたかのように、それ以上にそれを直視しなければならぬ訳の判らない義務感のようなものが私を突き動かしていた。ランサーを押しつけて、私は意を決して暗がりには足を踏み入れた。

噎せ返るような血臭。

果たして、そこに、地獄があった。

呼吸することを、忘れた。

ほんの数時間前、楽しそうに走り回った足が転がっていた。

そこからやや離れたところに、私に向かってキラメクを差し出してくれた小さな手もあった。

そして、『元気出し』と生意気に笑ってみせた少年の首すらも、もはやただの物体になり果てていた。

あの子だけじゃない。見渡せば、どれほどの数があるだろう。転がるランドセルは、見える範囲でも5つ、6つ。

「な、何てことを……」

絞り出すように言葉を吐き出すと、体が言葉以外のものを吐き出す欲求に支配された。

ろくに入っていない胃の中のを、私は足元に吐き出した。

目の前の現実には、心が拒絶反応を示しているようだ。

これが、人のやることだろうか。

これが、この世にあっていいものだろうか。

容赦なく体を鞭打つ吐き気に苦しみながら、私は、黒い感情が私を塗りつぶしていくことを感じた。

黒々としたその顔料は、この地獄を作った者たちに対する憎悪であり、このようなことを許容する神という存在に対する怒りであり、そして、まだちょっとしか生きていないこの子たちに対する悲しみ

が混ざったものだ。堪えることができず、私は今一度落涙した。

吐きながら、吠えるような声を上げながら、慟哭した。

私は知ってた。

あの物語において、キャスター陣営がどういう連中であつたかを。それらは時に活字で、時に音声で、そして時にアニメの映像で触れた記憶があつた。でも、それらはあくまで商業的な側面からそれなりにバイアスがかかったものだった。子供を惨殺した、とただそれだけを言えば簡単だ。だが、目の前に打ち捨てられた子供たちの姿を表するには、そんな言葉では全然足りなかつた。この無残を、この惨状を表現するには、言葉や絵画は余りにも無力だった。私は、本当の意味で知つた。これはフィクションではない。血で血を洗う、闘争という現実なのだ。

これが聖杯戦争という宴の、根底にあるものなのだ。

夢なのだとしたら、今すぐ覚めて欲しかった。

こんな悪夢、見たくなどなかつた。

だが、脳裏に浮かんだのは、よりもよつてこの世界を生み出した奴が著した言葉だった。

『そう思つたことで慰めになるなら、夢だと思つていなさい。……でも、長い夢になるわよ』

受け入れねばならないのだろうか。

条理と不条理。その二つの世界を隔てる薄氷を、望みもしないのに踏み抜いてしまったことを。

この世界が、夢でもなんでもない、我が身にまぎれもない現実となつて襲い掛かつてくるものであることを。

誰の仕業かは判らない。だが、私をこんなところに送り込んでくれた奴のことを、私は己の魂までを糧にしても呪い続けるだろう。

だが、それとこれは話が別だ。

例え世界が違ったとしても、天道というものがある。

こんなことが、許される訳がない。

記憶の中にある、雨生龍之介とキャスターの所業が、生々しいほどのリアリティを持って脳裏をよぎる。

どれほどの子供を、己の享楽のために殺めたか。

怒りと恐怖が、太極図のように私の中で渦を巻き始めた。

怖い。物凄く怖い。ごく真つ当な一般人にすぎない私だ。まして女。喧嘩ですらしたことがないくらいだ。命のやり取りなんて、私にはできっこない。何より、ついさつき味わった恐怖を思うと、今すぐにも逃げ出したい気持ちだった。

でも、今の私には、それをやってしまった後が、同じくらい怖かった。

何かができるのに、何もせずに逃げ出し、そのことを一生涯にかけて言い訳して生きていくことが怖かった。その現実が、どうしようもなく重かった。

死ぬような目に遭うかもしれない。

死ぬよりも辛い目に遭うかもしれない。

でも、それでもなお、目の前で変わり果てた姿になっている子供たちのことを思うと、どうしても後ろを向くという選択肢を選ぶ強さを持てなかった。

これは、正義なんて綺麗なものじゃない。

身を焼く黒い炎の名は、憤怒。

義憤などという気の利いたものじゃない。

これは純粹な憎悪だ。

こういうことをする輩を、こういうことに悦びを見出す輩を、許すことができなかった。

あいつらが今この瞬間も呼吸している事実を認められない。

司法当局の力が及ばぬところで、明日の犠牲者を夢見てほくそ笑むそいつらに、同じ分量の恐怖と痛みを突き付けてやりたかった。

あんな恐怖をまき散らしている輩の腸を引きずり出して、その色

を見てやりたかった。

キャラメル一つ、でも、この上なく暖かい無邪気な厚意。
奪われてしまったこの子達の可能性。

それらのためにも、私は私を私たらしめているルールに従わなければならぬ。

そして、それを実現する手段が美丈夫の形をして、私の隣に立っていた。

胃の痙攣が収まるまで、およそ1分。

涙が枯れるまで、さらに数分。

非力な拳を握り締め、私は静かに意を決した。

現し世の枠組みから逸脱する道に、その一步を踏み出すことを。

第2話（後書き）

とりあえず出来ているところまで試験公開中

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3169z/>

From Zero to Zero

2011年12月11日00時58分発行